

館林キリスト教会 デポジションノート（2006年）

12月 1日 今日の通読箇所 マタイ福音書 16：1～12

「パリサイ人とサドカイ人のパン種」

イエス様がマガダンの地方（ガリラヤ湖の西岸）から帰って来ると、パリサイ人とサドカイ人が、待ち構えていたようにイエス様のもとに来た。パリサイ人は、以前に「しるしを見せていただきありがとうございます」（マタイ 12：38）とイエス様に迫ってきた。そして今度は、パリサイ人が日頃から「死者の復活」のことなどについて考えを異にするサドカイ人と共に、再びイエス様に「天からのしるし」を求めて来たのである。それはイエス様を試みるためである。彼らはイエス様の言葉じりをとらえ、それを曲げて解釈し、民衆からイエス様を引き離すたくらみだったのである。彼らと語り合った後で、イエス様は弟子たちに「パリサイ人とサドカイ人のパン種を、よくよく警戒せよ」（6節）と言われた。これは彼らの不信仰で偽善に満ちた教えに気をつけるように、という意味である。

12月 2日 今日の通読箇所 マタイ福音書 16：13～20

「ペテロの信仰告白」

イエス様は、十字架を前にして、弟子たちと水入らずで過ごしたいと考えた。そこでガリラヤ湖のはるか北方、ヘルモン山の南の山麓にある、ピリポ・カイザリヤという町に行かれた。ここでイエス様は弟子たちに尋ねて、「人々は人の子（イエス様のこと）をだれと言っているか」と言われた。弟子たちは、人々が噂をしている昔の預言者たちをあげて答えた。するとイエス様は、さらに踏み込んで弟子たちに「あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねた。すると弟子のペテロは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と言った。イエス様はペテロのこの信仰告白を賞賛された。なぜなら、イエス様が「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」と言われているからだ。そして、私たちもこの信仰告白を信じた時に聖霊によって告白できるのだ。

12月 3日 今日の通読箇所 マタイ福音書 16：21～28

「十字架と復活の予告」

ピリポ・カイザリヤで、ペテロは恵みによって信仰告白をさせていただきました。イエス様は以後歩まれる十字架への道について明らかにしてくださいました。ペテロは愛する主が苦難に遭われると聞き「そんなことがあるはずはござ

いません」と主をいさめたとあります。22節に「すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて」とあり、様子が目に浮かぶようです。イエス様が十字架で死んでくださったので、救いの道が完成されたのです。神様に自分の罪をお詫びし、イエス様を救い主と信じるなら、永遠の裁きと滅びから救われるのです。この尊い救い主イエス様を信じないで「自分の命を損したら、なんの得になるうか」とのお言葉のとおりです。十字架の道を歩まれた主は「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と信仰の道を教えてくださいました。

12月 4日 今日に通読箇所 マタイ福音書17：1～13

「イエス様の変貌」

福音書を読み合わせますと、イエス様はペテロとヤコブ、ヨハネを連れて祈るために山に登られました。祈っておられる間にお姿が変わり、み衣は光のように白くなりました。イエス様がエルサレムで遂げようとする最後について、モーセとエリヤと語っておられたのです。熟睡して目覚めたペテロたちは非常に恐れ、思わず4節のように言いましたが、ペテロが話し終えないうちに神様のご臨在を示す輝く雲が彼らをおおい「これはわたしの愛する子…」とみ声がありました。イエス様が洗礼をお受けになった時のようにです。ペテロは後にペテロの第二の手紙1章16節以下で、イエス様のご威光の目撃者として栄光のイエス様も十字架のイエス様も事実であり、み言葉の教えは真理であることを証しています。

12月 5日 今日に通読箇所 マタイ福音書17：14～21

「からし種一粒の信仰」

イエス様と三人の弟子達が、ヘルモン山に上っておられた間に、あとに残った弟子達はとんだ失敗をしてしまいました。弟子達は、一人のてんかんの少年を治そうとして治す事が出来ず当惑していたのです。そこへイエス様が、山から降りてきて、少年の病を癒し、弟子達の面目をお立てになってくださいました。あとで弟子達がひそかにイエス様のもとに来て、その失敗の原因をお尋ねになると、イエス様は「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。」と仰せられました。「からし種一粒の信仰」とは、小さくても、命のある信仰という意味です。信仰に生きる秘訣は、小さい信仰でも、大きな神様に信頼をおいて生きる事なのです。

12月 6日 今日の通読箇所 マタイ福音書 17 : 22 ~ 27

「義務を果たしてつまずかせない」

イエス様は「からし種一粒の信仰があるなら……あなたがたにできない事は、何もない」と言った直後、ご自身の受難を預言している。これは信仰の偉大な力にもかかわらず、十字架と復活は神様のみこころであることを教えている。イエス様一行がカペナウムにきたとき、宮の納入金を集める人たちがペテロに、「あなたがたの先生は宮の納入金を納めないのか」(24 節)と問いかけてきた。その時、イエス様は支払う義務のない宮の納入金も、彼らをつまずかせないために支払った。そればかりかペテロの分も支払って、義務を果たすように命じている。パウロもローマ人への手紙 13 章 7 節で「あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果たしなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め」なさい、と教えている。

12月 7日 今日の通読箇所 マタイ福音書 18 : 1 ~ 14

「天国ではだれが一番偉いか」

弟子たちはイエス様のもとに来て「天国ではだれがいちばん偉いのですか」と尋ねた。弟子たちが天国を人間の社会のように考えていたからです。では、天国ではだれがいちばん偉いのでしょうか。第一に、幼な子のようにへりくだって、人々をイエス様のように愛する人です。みことばに「……幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである(5 節)とあるとおりです。第二に、御使いたちと共に、人々の救いの達成に奉仕する者として、人々を躓かせないように努める人です。第三に、人々を群衆の一人として見るのではなく、神様に愛せられた一人として見て、人々が失われることを惜しみ、連れ戻すために努力をする人です。

12月 8日 今日の通読箇所 マタイ福音書 18 : 15 ~ 20

「愛と祈り」

「これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」(14 節)のですから、兄弟が罪を犯したことが明確な場合、なんとかして悔い改め神様に立ち返ることができるように愛と祈りをもって労すべきだと教えられています。まず個人的に話して、悔い改めるなら幸いです。そうでないなら、証人が共に行って話し、さらに教会で話し合いを持つべきだということです。なお心を頑なにするなら「異邦人または取税人同様に扱いなさい」とあります。場合によっては死刑宣告というようなユダヤの厳しさを考えると、これは寛容な取り扱いでした。悔い改めるなら許され再び迎え入れられる可能性が残されていたからです。「もしあなたがたのうちのふたりが、どん

な願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれを行なうであろう」(19 節)というみ言葉のように悔い改めて立ち返ることを願って愛をもって祈る人々がいるなら、神様はその祈りをお聞きくださるのです。

12月 9日 今日の通読箇所 マタイ福音書 18 : 21 ~ 35

「返済不可能な借金」

当時1日の労賃は1デナリでした。タラントは6000デナリです。1万タラントは6000万日分、すなわち16万年以上の労賃に当たり返済不可能です。王様はすべてゆるしてくださいました。ゆるされた人が貸していたのは100日分の労賃でした。借金とは、積極的な罪を犯したわけではありませんが借りた物を返せなかったのです。私たちは自分の所有物というものではなく、実は命も健康も、生まれつきの能力も時間も与えられたものです。しかし神様を知らず信じず、神様が委ねてくださった、神様のものを、本来の目的から大きくそられて、自分のために使い続けてきたのです。積極的な罪を犯さなくても、借金をし続け今は莫大な額になっているのです。それにもかかわらず神様はイエス様を信じた者を、イエス様の十字架のゆえにすべてゆるしてくださいました。イエス様はペテロを諭してくださいました。七たびを七十倍するまで、すっかり忘れてゆるしなさい、あなたも莫大な罪をゆるされているのですから、と。

12月10日 今日の通読箇所 マタイ福音書 19 : 1 ~ 15

「結婚、離婚、独身」

パリサイ人たちはまたもやイエス様を陥れようとして「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか」と質問してきた。イエス様は彼らが聖書読みの聖書知らずであることを示し、創世記2章24節のみことばを引用し、「神が合わせられたものを、人は離してはならない」と答えられた。それに対し、彼らは「それでは、なぜモーセは、妻を出す場合には離縁状を渡せ、と定めたのですか」と屁理屈を言った。イエス様はこうした彼らの心の頑なさを厳しく戒め、すべては神のみこころによってある者は結婚、ある者は神の為に独身でいる事を強調された。こうしてイエス様は、人生の重大な問題である結婚の真実な意義を示され、離婚、独身についての考えをも明らかにしたのである。

12月11日 今日の通読箇所 マタイ福音書 19 : 16 ~ 30

「富める青年の誤算」

一人の青年がイエス様のもとに来て「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」と質問した。13節から15節で、弟子たちが、幼な子らを見て天国にふさわしくないと考えたのとは対照的に、今度は、富める青年を見て天国にふさわしい人だと考えたのであろう。誠実な青年は、永遠の生命、つまり真の救いを心から求めていた。けれども彼には、二つの誤りがある。その一つは、自分の力で善を行い永遠の生命を得ようとした事。二つ目は、イエス様が命を得る為に捨てる事を勧めたが、その意味を理解できなかった。青年は人よりも物を愛していたので、目に見えるものを捨てられず、悲しみながらイエス様のもとを立ち去った。

12月12日 今日に通読箇所 マタイ福音書20：1～16

「ぶどう園」

ある家の主人は、夜が明けると同時に一日1デナリの約束で労働者を雇いぶどう園に送りました。その後も「相当な賃銀を支払うから」と雇いました。主人は皆に1デナリを支払いました。遅く雇われた人はどんなに驚き感謝したことでしょう。主人は恵み深く、遅く雇われた人にも気前よく支払ったのです。16節の「あとの者」とは、少ししか働けなくて少しの報酬しかないだろうと思っている人、「先の者」とは、多く働いたから多くの報酬があるだろうと期待している人のことです。しかし少ないだろうと諦めていた人が「先の者」のような報酬をいただくのです。神様は、救いを求めて来る者に尊い救いの恵みをくださいます。また、あとから救われて少ししか働くことができなかつた人にも恵み深く報いてくださいます。それは神様のご一存なのです。19章27節のペテロの「わたしたちは一切を捨てて、あなたに従いました。ついては何がいただけるのでしょうか」という質問への答えです。

12月13日 今日に通読箇所 マタイ福音書20：17～28

「仕える人」

エルサレムへ向かう途中、イエス様は、これから受けようとなさる十字架の苦難と三日目に死からよみがえるという予告をなさいました。ゼベダイの子らの母とは十二弟子のヤコブとヨハネの母です。イエス様の「何をしてほしいのか」というお言葉に「あなたの御国で、ひとりはおあなたの右に、ひとは左にすわられるように、お言葉をください」と願いました。マルコによる福音書には本人たちが願っていますから、親子で願ったということでしょう。この言葉に、ほかの十人の弟子たちは憤慨したとあります。このときイエス様は、支配したり、権力を振るうのではなく、仕える人、僕とならなければならない、と教えてく

ださいました。その姿はイエス様のお姿そのものでした。イエス様は仕えられるためではなく、仕えるために、また多くの人のあがないとして、ご自分の命を与えるためにおいでくださったのです。

12月14日 今日に通読箇所 マタイ福音書 20：29～34

「二人の盲人」

二人の盲人がエリコの町の道端に座り、物乞いをしていた。時代は彼らに職も生活の保障も与えていなかった。その時、うわさに聞いていた救い主のイエス様が彼らの前をお通りになったので、彼らはこの絶好の機会を逃すまいと思った。そこで二人は「主よ、ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と大声で叫んだ。「ダビデの子」とはメシヤの称号である。なぜならユダヤ人はメシヤ（救い主）はダビデの子孫から出ると信じていたからである。群衆は二人を黙らせようとしたが、彼らは執拗に叫び続けた。それでイエス様は彼らを呼び寄せ、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねた。彼らは、イエス様が自分たちの目をあけて下さると信じ、「主よ、目をあけていただくことです」と素直に答えた。イエス様はその信仰に応え、彼らの目を見えるようにして下さった。

12月15日 今日に通読箇所 ヨシュア記 1：1～9

12月16日 今日に通読箇所 ヨシュア記 1：10～18

ヨシュア記 1章

モーセが大人物であったそれだけ、その後継者に立てられたヨシュアは気が重かったに違いない。しかもカナン入国という、言わば、総仕上げともいべき難事業はこれからである。主はヨシュアに、モーセに与えられた約束、臨在、勝利をそのままヨシュアに与えるとくりかえし激励して下さった。ただし条件が2つあって、「み言に忠実に従うことと、「信仰と勇気をもって事に当る」ように、きびしく求められた。

12月17日 今日に通読箇所 ヨシュア記 2：1～14

12月18日 今日に通読箇所 ヨシュア記 2：15～24

ヨシュア記 2章

カナンの人たちは、イスラエル接近のうわさにふるえ上がり、城壁を高くしてただ抵抗の用意をする。その中で、ラハブは身分のいやしい女ながら、真の神とその裁きをおそれ、出来れば許されて主の民に加えられることを望んだ。はしなくも神の摂理のうちに、逃げこんできたイスラエルの偵察者を助けることによって、ラハブとその一家は、救いの約束を取りつけることができた。窓から垂れた目印の赤い紐。ここにも救いのひな形がある。

12月19日 今日に通読箇所 ヨシュア記3：1～6

12月20日 今日に通読箇所 ヨシュア記3：7～17

ヨシュア記 3章

イスラエルの人々はいまや、奇跡的にヨルダン川を渡り、約束のカナンの地を踏みしめることとなった。ヘブル人への手紙四章は、これを1つの霊的な経験の象徴として用いている。すなわち彼らの荒野の生活はそのまま、霊半分、肉半分、神半分、世半分の、勝利と自由のないクリスチャン生活を示し、ヨルダン川は、そこを一步踏み越えて、信仰と服従、自由と勝利のクリスチャン生活に入ることを示すというのである。

12月21日 今日に通読箇所 ヨシュア記4：1～14

12月22日 今日に通読箇所 ヨシュア記4：15～24

ヨシュア記 4章

「このように、あなた方自身も罪に対して死んだ者であり、キリストイエスにあって、神に生きているものであることを認むべきである」ロマ書6章11節。ヨルダンの川底にすえられた12の石塚、また川底から運ばれて、ギルガルにすえられたもう1つの12の石塚。これは彼らにとって、「荒野の生活の終り、カナンの生活の出発」の記念碑であったが、我々も常にみ言と信仰によって、「キリストにあって、罪に死に神に生きる者である」ことを確認し続けよう。

12月23日 今日に通読箇所 ヨシュア記5：1～9

12月24日 今日の通読箇所 ヨシユア記5：10～15

ヨシユア記 5章

すでに勝利の確信はあっても、いよいよ戦争の前夜、ひとり目覚めて祈るのは、何といても指導者責任者の気持である。ヨシユアは祈りのうちに、軍の将として武装し、抜剣した主の顕現に接した。主は、簡単に「ヨシユアの軍を助ける」とは仰せられず「私こそ主の軍勢の将である」と言われた。むしろヨシユアの軍がそのまま主の軍勢たり得るかいなか、これこそがきめ手となった。彼は靴をぬいで聖なる主を拝し、みずから反省し、点検し、再び霊的な取り扱いを受けたと思われる。

12月25日 今日の通読箇所 ヨシユア記6：1～11

12月26日 今日の通読箇所 ヨシユア記6：12～27

ヨシユア記 6章

「ぐるぐるとまわり」「足ぶみ状態」などは前進も解決もできない、ムダ骨折りの形容に使われる言葉だ。しかしそれでもやめられず、逃げられず、ムダ骨折りを承知でも頑張らねばならない事だってある。お習字、オルガン、語学の勉強、また伝道だってそう。そしてそれが、案外大切だ。エリコ攻撃の場合、神様はヨシユアたちに命令と約束をあたえてわざわざぐるぐるまわりをさせた。それが勝利の道だったのである。

12月27日 今日の通読箇所 ヨシユア記7：1～9

12月28日 今日の通読箇所 ヨシユア記7：10～15

12月29日 今日の通読箇所 ヨシユア記7：16～26

ヨシユア記 7章

神様は、人が暗い所で行うことを残らず見やぶり、正しい裁きを行われる。アカンの罪によって、イスラエルは、神から見はなされ、ついにみじめな敗北を招く結果となった。私達の自分の罪によって自分だけでなく、神の宮である教会にまで影響をおよぼし、神のみ名を恥しめるようなことがあってはならない。

むしろすべての罪を取りのぞいで頂き、神様の栄光を現す器として用いられた
い。

12月30日 今日の通読箇所 ヨシュア記8：1～25

ヨシュア記 8章1～25

アイとの戦いにおいて、イスラエルが敗北した原因は、第1にアカンの罪、次に全軍の高ぶりとお断であった。不思議に罪と高ぶりは一緒のものである。奇妙な高ぶり方のおかげに、必ずかくされた罪がひそんでいるといってもいい。2度目のアイの戦いの様子を見ると、回復したイスラエルの慎重さ、真剣さが見られる。「ライオンはウサギを取るにも全力をつくす」という。清潔と真剣。これはいつも勝利の秘訣である。

12月31日 今日の通読箇所 ヨシュア記8：30～35

ヨシュア記 8章30～35

エリコとアイの勝利は、全パレスチナの人々をふるえ上らせて、暫くはあえて敵対する者もなかった。この時ヨシュアは、かねてモーセに命じられた通り、エバル山に祭壇を築いて礼拝を献げ、律法を記した記念の石を立てた。また律法を朗読させた。エバル、ゲリジム両山のスロープに、相対して並び立った人々はこれにアーメンと唱和した。言わば約束の地パレスチナの献堂？式のようなであった。